徳島新聞

徳島大病院

国内2例目手術終える

神経性難病比の患者 成果、28日に発表

全身が不随意の動きをする神経性の難病・ルーバッグ病にかかったフィリピン人男性の手術が15日、徳島市内の徳島大学病院で行われ、無事終了した。ルーバッグ病の手術は国内2例目、世界では5例目で、効果が判明するのは約2週間後。

手術を受けたのは、マニラ市近郊在住のジョエル・モンセラテさん(49)。徳大病院によると、午前9時に手術が始まり、脳に電極、前胸部にペースメーカーをそれぞれ埋め込んだ。手術は予定の6時間を大幅に超える9時間半に及んだものの、術後の患者の体調は安定しており、会話もできるという。

16日から電極に刺激を送り、神経の働きが改善されたかどうかをみる。徳大病院は28日に成果を発表する予定。

(森麻実)

記者席

徳大病院の難病治療に期待

徳島大学病院で15日行われた神経性の難病・ルーバッグ病患者の脳外科手術は、予定の6時間を大幅に超え、9時間半に及んだ。「何か起こったのだろうか」と心配したが、手術は無事終了。患者のフィリピン人男性の容体は安定していると聞き、ほっとした。

体が不随意の動きをするルーバッグ病は遺伝性の病気で、フィリピン人を母親に持つ男性に多い。病気の原因などは分かっておらず、治療薬もない。食事や睡眠もままならないため、ストレスなどから自殺する患者が多いという。

徳大病院では、フィリピンの国立病院と共同研究を進めており、2007年にはルーバッグ病の原因遺伝子の特定に成功した実績がある。現地の医師らと頻繁に情報交換しており、患者の帰国後も連携を図りながら治療を進めることができる。

手術の効果が判明するのは約2週間後。患者の症状が改善されるのはもちろん、さらに両国の研究が進み、病気の治療法が確立されることを期待したい。

(森麻実)